

面白いと思うことを、時間をかけて考えてみませんか

池松峰男（総合教育院）

皆さん、お元気ですか。今年もツバメの季節となりました。毎年楽しみにしていますが、今年はイマイチです。「コロナ疲れ」でしょうか。さて今回は、私が「精神と物質」（立花隆・利根川進著）という本に元気づけられたというお話です。

「精神と物質」は、『免疫抗体のDNAが胎児から生体へ成熟する過程で再編成される』ことの発見で日本人初かつ単独でノーベル生理学・医学賞を受賞した利根川進博士とジャーナリスト立花隆氏の対談集です。

この本は文字通り、精神活動が生命そのもので、その生命は物質によってもたらされていることを分かりやすく解説しているのですが、読後以来ずっと忘れ得なかったのは、主題である分子細胞生物学についてではなく、「大秀才は生物学者に向かない」という部分です。

利根川さんは、彼がスイスのバーゼル免疫学研究所にいた時の所長ニールス・ヤーネの言として『・・・サイエンティストにも、すごく頭のいいのと、そうでないのがいる・・・記憶力がものすごくいい秀才タイプは、記憶力が邪魔をして、ひらめきみないた能力に欠けるといふんだね・・・』を紹介しています。そして同僚研究者チャーリー・スタインバーグについて『・・・ぼくが出会った人間のうちで一番頭がいい男だね。とにかく何でも知っている・・・それがね、自分の研究はダメなんですよ。頭がよすぎて自分の発見ができない。自分の研究なんかやらせてもすぐあきちゃう・・・』と評しています。

私はものすごく単純にできていて、かつ、周りのすごい人を見ると「ワシはアホかなあ」と思うタイプだったので、「アホでもええこともあるやん」ということに、本当に、ものすごく強烈に勇気づけられました。私には、この考えがあったからこそできたと思える仕事が多量にあります。たった一つのデータを解釈するのに何か月もかかったけれども、途中で投げ出さずに論文までこぎつけたといったようなことです。そのような経験を通じて、「自分は頭がいいか、悪いか」なんてどうでもいいということ、頭のよさで他人と自分を比較して喜んだり、落ち込んだりすることが無駄であること、そんなことを考える暇があったら、「考える必要のあること」を考え抜くことが大切であること、そして考えていればいつか良い結果に巡り合えることを学びました。

皆さんにおすすめしたいのがこの点です。今からの長い人生、一つや二つぐらい「おもしろいな。でもこれなんでやる」と思うことがあるはずですよ。そうしたら、とにかくそのこと（だけ）を考える。たくさん時間を使って考える。あーわかんねえと思ってから、また考える。そういう姿勢が、大切だと思うのです。

これからの一カ月（もしかしたら、もっと長くなるかもしれませんが）、思いもよらない形で「手に入れた」時間です。外はいい天気です。こんどはウグイスの、そして地名の由来ともなったヒバリの声が聞こえています。ぼーっとするのも大切ですが、たまには外に出て、じーっくりと考えみませんか。

・・・ところで皆さん、ヒバリって、どこに巣をつくるか、知っていますか。

（終わり）